



菅原
勇太

B
B
B

もくじ

もくじ

第1章	エキセトシリックな状況は避けたい／7
第2章	松井／26
第3章	ラブプラス／39
第4章	赤いミニカー／55
第5章	大久保／68
第6章	アサシン／87
第7章	不思議なアクセス／99

第8章	告白／	115
第9章	あやの／	130
第10章	e g g m a n／	143
第11章	イタチ／	158
第12章	プロになりたい／	169
第13章	ダークセルフ／	186
第14章	落陽／	200
第15章	トーストのバター焼き／	217
第16章	I L O V E Y O U／	229

- ◎編集 佐田 満
- ◎構成 佐田 満
- ◎カバーロゴ yuki
- ◎装丁 yuki
- ◎画像処理 デザインオフィスはな
- ◎コピー 宇田川森和
- ◎協力 岡 謙二
- ◎協力 久保卓也

第1章 —— エクセントリックな状況は避けたい

2011年1月30日 日曜日

空は晴れているようだ。だが太陽はどこかにあるようで、まるでどこにあるのか分からない。午後1時過ぎ、春樹は肌を突き刺すような風が吹き抜ける中、ギターを背負って小さなヘッドフォンをかけ、人込みをかき分けるようにJR新宿駅南口を出た。そして、広い甲州街道沿いの歩道を西新宿に向かって歩いていった。目指す場所はライブハウス「初台WALL」。人々はゆっくりと、あるいは急ぎ足で寒そうに身を縮めて歩いていたが、春樹はそうではなかった。昨年の暮れに20歳になったばかりの春樹は、その日、足取りが弾んでいた。リズムを刻んでいたと言ってもいい。実際、彼の頭の中ではヘッドフォンの音に合わせてギターをピッキングしていたし、彼のバンドメンバーの動きさえ映し出されていた。

今日はちょっと特別なライブがある。春樹のバンドは、それに出演するのだ。甲州街道を15分ほど歩くとWALLLに着いた。入口付近の路上では、その日のイベントに出る数組のバンドのメンバーや友達の女の子などが楽しそうにしゃべり合っている。春樹がビルの地下にあるライブハウスに向かおうと急いで階段を下りる寸前だった。突然、横からひとりの女の子が彼に体当たりしてきた。春樹は驚いてヘッドフォンを外すと、その子を見た。

「あはは！ びっくりし過ぎだから！」

大原ゆいかだ。春樹より3つ年下で17歳の女子高生。少しダボツとしたジーンズ姿で隠れてはいるが、そこら辺のアイドルやモデルよりもプロポーションも顔もいい。というか、何か特別な雰囲気をもっている。春樹は顔を赤らめてゆいかを見て、すぐに目をそらした。春樹は一応言おうと思った。

危ないだろ……。

でも唇がわずかに動いただけだ。ゆいかはそんな春樹をうれしそうな顔で眺めている。そのとき、ゆいかの唇が、春樹の耳元に、静かに、ゆつくりと、動いた。

そして、ささやいた。

「ねえ……、今日の夜さ、ライブが終わったら……、ご飯、食べに行こ？」

何て心地いい声なんだろう。ゆいかは明るく笑っている。可愛くて、ピュアで、健康的で、天真爛漫で、妖精みたいで、なのに小悪魔的。本人は自分の魅力を自覚していないのだろう

か。春樹は一瞬ゆいかを見たが、またすぐに視線をそらしてぶつきらぼうに言った。

「……いや、今日は、打ち上げがあるし」

「打ち上げ、行くの？」

「うん」

「じゃあさ、それ早めに切り上げて2人で別の店に行こうよ」

「いいけど……。でも、そんなことしたら、みんな『おまえら付き合ってたのか?』なんて騒ぎ立てないかな」

ゆいかはくすつと笑った。春樹はそんなゆいかの笑顔に吸い込まれそうな気になった。まるで禁断の実を食べてはいけなさと知りながら、どうしても自分を制御できずに手を伸ばしてしまふような感覚……。春樹は心を鎮めようと目を閉じて深呼吸をした。彼はいつも心を鎮めようとする。情熱も欲望もありあまるほどあることを知っていたいながら、決してそれに溺れることはない。いや、春樹は溺れることが怖かった。自分を失いたくなかった。失うほどの「自分」がどこにあるのかも分からなかったけれど、冷静さを保ちたかった。つまり、それが彼の癖だ。

そう、何のことはない。要するにただ女友達と食事をするだけだ……。

春樹は、ゆいから視線を外した。その目を見ては、言えなかった。

「うん……。まあ、いいよ。終電までには帰るけどね」

「当たり前じゃん！」

ゆいかはおかしそうに笑った。

午後5時過ぎから始まったその日のライブは、午後8時ごろには終わった。全般的にまずの出来だった。ライブといっても、BBBはWALLが主催するイベントに出演する数組のバンドのひとつだ。とはいえ、それが春樹にとって特別なライブイベントである理由は、最近、若手プロデューサーとして実力を発揮しつつある松井が企画して人気を集めているWALLの中心的なイベントだったからだ。それに選ばれたということは、松井がBBBというバンドの「実力」を評価してくれたことを示している。

今夜は200人も入っていただろうか。ぎっしりで、まさに立錐の余地もないほどの熱苦しさだった。冬だということここでは完全に忘れさせてくれる。WALLはライブハウスとしては少し縦長で、ステージからは最後尾の観客が見づらい。だからパフォーマンスが重要だった。春樹はパフォーマンスは計算に入れていたが、自分のMCがまだおぼつかなく、たこと、肝心なギターソロで一瞬フレットを間違えて外してしまったことが悔いに残った。そうして冷静にMCを繰り返し、そのフレットを頭の中で再現し、ミスを減らしていく。そういう努力の積み重ねが必要だということを、春樹は徹底して自分に叩き込んでいた。

すべてのバンドのライブが終了すると、各バンドのメンバーやその友人たちがぞろぞろと

歩きながら居酒屋に向かった。その和風居酒屋は全国チェーン店のひとつで、ともかく安く、店内はいつもざわついているし、店員の大半は若いアルバイトには違いないのだが、接客マニユアルが行き届いていること、そして魚類が新鮮で安いことで人気だった。何でもこのチェーン店を立ち上げたころ、オーナーは近郊の漁協と直談判して直行便トラックを手配したということだ。卸売市場や中間業者を経由しない。それが安さの秘密だった。

「いらっしやいませ！」

そこに松井の姿はない。それはいつものことだ。バンド連中とその取り巻きを引き連れてやってきたのは、松井のアシスタントを務める南。アシスタントと言っても、要するにまだ使い走りに過ぎないのだが。

「WALL……、だけどさ」

南はちよつと偉そうにそう言って、コホンと口を鳴らした。

「はい、WALL様ですね！ お待ちしていました。いらっしやいませ、どうぞ！」

案内された席は10畳ほどの部屋で周囲からは隔離されていて、そこだけ少し店内の騒音が薄らいでいる。

春樹はみんなが座るのを見計らって、意識して通路側に腰を下ろした。ゆいかは春樹のほうをまるで見ることなく、春樹とはひとり置ききの左の席に着いた。

乾杯をして30分ほど経過したときだっただろうか。春樹が中ジョッキを空けたころ、ゆい

かが春樹の背後から腰を指で突いた。見ると、ゆいかは誰にも分からないように一枚の小さな紙切れを差し出している。春樹はテーブルの下でそと紙を開いて見た。手帳を引つ剥がしたような淡いピンクのキャラクターが踊るその紙には、急いだのかやや乱暴に、けれども丸っこい文字で「10時半にPERIODでね」と書いてある。PERIOD？ それは今日のライブハウスから、甲州街道を新宿方面に少し歩いて路地を入ったところにある店だ。春樹は頭の中で、その店への道順をなぞった。ゆいかの方を見ると、もう上着を着てナツプザツクを背負い、みんなに手を挙げている。

「じゃあ、あたし明日の朝早いからそろそろ帰るね！」

「じゃーね！」

「ゆいかまたねー！」

みんなはそれぞれに出口に向かうゆいかを見て、手を振っている。春樹は何だか不思議な気持ちになった。今帰ったゆいかの言葉は嘘なんだ。ゆいかは自分とこれから2人きりで会うために、嘘をついてこの場を抜け出した。春樹はみんなと同じように、ゆいかに手を振った。そう、これも嘘だ。春樹は自分の胸が震えているのが分かった。彼はそんな自分が嫌いだった。興奮すること、欲情を覚えること、感情に振り回されること……。それは彼が最も嫌なことだ。

ゆいかか店を出てから春樹は、じつと時間を計算していた。店を出るのは30分後にしよう。

そうすれば、かろうじて歩いて10時半にはPERIODに着ける。

「じゃ、オレ明日バイト早いから…」

もちろんそれも嘘だ。人はいったいどれだけの嘘を重ねながら生きていくのだろうか。でも今夜の嘘は明らかに他の何でもない嘘とは違う。誰かを騙しても何の意味もないのに騙さざるを得ない、そんな嘘。春樹が一番苦手な嘘……。

彼の頭の中は急速に回転していた。「ゆいか」という女の子は春樹の仲間内でちょっとした噂になっていた。春樹の友達だけでもゆいかと2人きりで遊んだことがあるという奴は少なくなかった。その中には本気でゆいかに惚れている、あるいは惚れた、という奴がいったい何人いることだろう。ところが、ゆいか本人が一体誰が好きなのか、は誰も知らない。

男ども誰もがみな同じことを考えている。

ゆいかは自分だけに特別な恋愛感情があるのかもしれない……。

しかし現実とは違う。いつも後で気付くのだ。ゆいかのお気に入りは自分だけではなかった、他にも自分と同じ思い込みでゆいかに恋をしている男が不特定多数存在しているのだと。そうして、ある奴は泣き、ある奴は嫉妬し、またある奴はそれでもゆいかと遊びたがった。

しかし……と、春樹は思った。今までゆいから自分に対して、こんなアプローチをしてきたことはまったくなかった。それが今日なぜか突然ターゲットにされた。オレはどうなんだろう。オレはゆいかが好きなのか？ いや、オレだけは違う。オレは女子に翻弄された

り、狂ったりするようなことはしない。絶対にしない。したくない、それだけは……。

しばらくしてPERIODの入口付近に着くと、ゆいかの姿が見えた。

「春樹、こっちこっち！」

薄暗い路地で、ゆいかがピョンピョン飛び跳ねながら手招きをしている。心からうれしそうに目を輝かせている。春樹は小走りでゆいかの方に駆け寄った。おもわず自分の唇が笑顔に変わるのが分かった。どうしたんだ、オレは??

店内は先ほどの和風居酒屋とは異なり、洋風の椅子席で落ち着いていて、テーブルに置かれたキャンドルの灯りに包まれてサラリーマンや中年のカップルなどそれぞれが静かに話をしていた。どうしてこの店を、高校生のゆいかが知っているのか不思議だった。だがそれが彼女が選んだ今夜のステージだ。ゆいかと春樹は店員に案内された奥の個室席に腰をおろした。春樹はおしぼりで手を拭きながらゆいかに目をやった。彼女は屈託のない表情で、メニューを見ながら真剣にページをめくっている。

今までいったい何人の男がコイツに心を奪われ、弄ばれてきたのか。コイツは自分が男の心を虜にする魅力にあふれていることを知っているに違いない。そして今、まさにオレ自身がコイツのターゲットにされようとしている。ここでもしコイツに恋でもしてしまえば、結果的にはオレも他の男と同じように泣きを見るはめになる。そうなってたまるか。そう考えながらも、否応なしに春樹の鼓動は高ぶっていった。それはまるで竜巻に似ている。そう否

応なしに今自分の心に吹き荒れている。どこかにつかまらなければ、オレはイカれてしまう。「どうしたの？」

ふと見ると、ゆいかが春樹の顔をのぞき込んでいた。彼は異様なほど力を入れてメニューを掴んでいることに気付いた。

「いや、別に……」

「ねえ、何にする？」

「あ、そうだな。とりあえず」

「ねえ、ワイン飲んでもいい？」

「えっ、大丈夫？」

「あたし、私服だし」

「……じゃあ」

春樹が、そう言おうとするよりも早く、ゆいかはもう店員を呼んで、赤のグラスワインを2つ注文している。それにカマンベールチーズも……。それはまるで大人のやり取りのようで、実にさりげない。それはどう見ても高校生の女の子のすることじゃない。春樹はさらに頭を混乱させていった。

ふとゆいかの目に焦点を合わせると、彼女はうれしそうな瞳でじっと春樹を見つめている。吸い込まれそうな瞳だ。すんでのところで彼は正気を保って言った。

「……何見てるの？」

ゆいかは何も言わない。ただじっとうれしそうに春樹を見つめている。そのあまりものまっすぐな瞳に、春樹は思わず目をそらした。ゆいかは彼の顔を人差指で真っすぐに指しながら言った。

「はい、春樹の負けー！」

春樹はそらした視線をゆいかに戻した。

「負けて？」

ゆいかは春樹の目を見つめて真剣な表情で言った。

「どっちが先に目をそらすか」

「そんなの聞いてないよ」

2人は自然と笑った。何だかまるで、生まれたての新鮮なカップルのようだ。シ、ア、ワ、セ？　これが幸福というものなのか。春樹は考えた。いや、いつものように冷静に考えようとした。目の前にゆいかがいる、2人きりで食事をする。2年ほど前からゆいかとは知り合っていたが、こうして2人だけで食事するのは初めてのことだ。とにかく自分は今、ひとつの空間にゆいかと2人きりである。それはまったく予想外の「幸福感」だった。幸福とは何か、なんてことなど考えることさえできないほど、の……。だが同時に不安も沸き起きている。

だが、ゆいかはあくまで楽しそうだ。

「じゃあ、もう1回やる？」

「え？」

「どっちが先に目をそらすか」

「何で？」

「あたしが考えたゲームなの。面白くない？」

ゆいかは自然体で笑っている。春樹は赤くなつた顔を隠すように、おしほりで顔を拭きながら言った。

「ゲームっていうか……」

「やるの？ やらないの？」

ゆいかは春樹を見つめた。春樹はおしほりをテーブルにゆっくりと戻した。

「いいよ、やらなくて」

それでもゆいかはうれしそうに、瞬きひとつせずじつと春樹を見ている。

「何だよ？」

春樹がそう言ってもゆいかはじつと春樹を見つめている。春樹は苦笑いをする心を心がけて、ゆいかを見た。

「もういいよ、そのゲームは」

「そう……」

ゆいかはなぜか突然、悲しそうに顔を横に向けた。その表情は本当に悲しそうだった。まるで映画のワンシーンのようなその悲しみの表情に、春樹は思わず胸を打たれた。一瞬すべての時間が止まった。店内の雑音さえもすべて消えた。これはどんなトリックなんだろう？

「どうしたの？」

ゆいかが春樹の目の前で手を横に振りながら言った。春樹は意識を元に戻すように目を泳がせた。

「あ……いや、ちよつと……」

「春樹は、あたしといるのが楽しくないの？」

「いや、そんなこと……」

「そつ、あたしは楽しいよ！」

それからゆいかは、何かを思い出したように声をひそめて言った。

「今日のライブ、すごいカッコよかったよ!!」

「あ、そう？」

春樹は可能な限り無表情な顔をして返事をした。だが心の中で、どの程度ゆいかが本気でそう言っているのかが気になった。よし、いいぞ。オレは冷静さを取り戻しつつある……。

ゆいかはさらに声を震わせるように言った。

「うん、すごく、よかった!!」

ゆいかの瞳は真剣そのものだった。けれどもゆいかが真剣でなかったことなんて、これまでにあったのだろうか？ その真剣そうな雰囲気にも騙されてきたんじゃないのか？ 春樹は心を落ち着かせた。

「そう……、ありがとう」

それからの会話はたわいのない内容ばかりだった。つまり最近あった面白い話や、バンド友達の話など、だ。しばらく話をしていくうちに春樹は、やはり聞いておくべきことがある、と思った。自分の男友達が、何人もゆいかに心を奪われて悩んでいるという状況について。ゆいか自身は、それを理解しているのだろうか？ それとも無意識のうちに、何人もの男友達の心を奪ってしまっているのだろうか？ 春樹は「客観的に」それが知りたかった。しかしこんな話を切り出すのはタイミングが難しい。ちょうどそのときゆいかが言った。

「じゃあさ、春樹からあたしに何か質問してよ。何でも答えるからさ、どんな質問でも」

「どんな質問でも？」

「うん、どんな質問でも答えなきゃいけないの。その変わり、春樹もあたしの質問に答えてよ？ たとえ口が裂けても言いたくないような答えだとしても」

「何それ？」

春樹はちよつと笑った。

「今考えたの。じゃあこれ、質問ゲームね！」

ゆいかの瞳は相変わらず輝いている。春樹はふと思った。そういえばゆいかは普段から、泣いたり怒ったりしているところを見たことがない。さっきの悲しみの表情は、生まれて初めて見たようなあまりにもドラマチックなものだったが、そんなことなどもう本当にありえない非現実的な夢のように思われた。ゆいかにはいつも笑顔で元気なイメージがある。アルコールが入っていたせいも、ふと春樹の脳裏にそんな笑顔のゆいかの表情をベッドの上でゆがませてみたいという思いが貫いた。春樹は目を閉じて顔を振ってから、天井を見つめて目を開いて意識をしずめた。

「何？ 天井に何かあるの？」

ゆいかも天井を見上げた。

「いや、何もないよ」

春樹は会話をもとに戻した。

「で、質問ゲームだよね？」

「うん、質問ゲーム。じゃあさ、あたしから聞くね」

「ちょっと待って、一応答えられる質問にしてよ？」

「大丈夫だよ、普通の質問だから」

ゆいかはとてもうれしそうに笑うと、春樹の目を見つめて言った。

「ねえ、春樹は、今、好きな人がいるの？」

「え!？」

また一瞬、時が止まった。今、目の前にいるゆいかが、確かにそう言った。今夜はどうにかしている。なんてトリッキーなんだ。オレはもう、コイツの手のひらの上で泳がされていいのか。

ハルキハ、イマ、スキナ、ヒトガイルノ？

確かにそう聞こえた。どう答えればいいんだ？ 春樹は思わず「ゆいかが好きだ」と言いそうになる口を封じて、目を閉じた。それは自分の心が叫び出そうとしている本心だったのだろう。実際、春樹はこうしてゆいかと2人きりであることの特別さを心の底から感じていた。しかしこれは、きつと一目惚れってやつか心の迷いだ。今、心を持っていかれそうになっているが、オレはここに留まっている。春樹は泳ぎそうになる視線を、テーブルに置いた自分の手に留めるようにして言った。

「いや……、今は別に……、いない、かな」

「ふーん？」

ゆいかはキョトンとした瞳で春樹を見た。ここがタイミングだ、と思った。春樹は逆にゆいかに質問した。

「じゃあ、ゆいかは、好きな人いないの？」

「いないよ」

ゆいかはあつさりと言い返した。あまりのあつさりさに、春樹は次の言葉を思いつかなかった。いや本当は、どのように言えばいいのかまだ迷っていた。コイツは何者なんだろう？目の前にいるゆいかを見ながら春樹は考えた。するとゆいかは、面白いものを見るような視線で言った。

「ねえ……、何考えてるの？」

「……いや、ちよつと質問変えていい？」

「何？」

「あのさ」

「うん？」

「ゆいかはさ、自分が誰かに恋されてるかもつて考えたこと、ある？」

「あたしが？」

「そう」

ゆいかは少し考えてから言った。

「あたしのことを、好きな人がいるかどうかってこと？」

「まあ、そういうことになる」

「えー？ いると思うの？」

ゆいかの顔は真剣だった。だがそれが本音かどうかは分からない。本当はすべてを知っていないながら、わざと知らないふりをしているかもしれない。春樹はゆいかの言動を細かく観察してみた。表情のちょっとした変化や声のトーン、視線の動き、全体の空気から、それが本心なのか、本心であるように繕っているのか、あるいはまったくの嘘なのか、それを心の底から見抜こうと努力してみた。春樹はじつとゆいかの瞳を見つめながら言った。

「もしさ、ゆいかのこと好きな人がいるって言ったら驚く？」

「えっ、何で？ 何なに？ いるの!？」

ゆいかはとてもうれしそうに、心の底から興味津々だという顔をしている。春樹は全神経を集中させてゆいかの表情を観察した。そこに嘘は見つからなかった。いや正確には、春樹には何も見抜くことはできなかつた。つまり現在の調査結果からいえば、ゆいかは自分が気付かないうちに多くの男達の心を奪い、ときめかせていることをまったく意識していない、ということになる。春樹は昔からゆいかのことを、本当はすべて分かっている計算高い女なんじゃないかとちよつと勘ぐっていた。

だが春樹は、自分の考えを改めようと決めた。とにかくゆいかはピュアな女の子だと春樹は決めることにした。単純に。そうしなければ自分の心は、きつと深いドグマの中に落ちることになる。一旦ピリオドを打とう。今夜はそういうことにしておこう。そうしてまた今度考えればいい。

2人は終電近くまで語り合った。帰り際に、ゆいから春樹に紹介したい人がいるという話が出た。音楽業界でマネージメントプロデューズをしている51歳の大久保という男性だという。彼のことなら、実力があるということだけは少しだけ知っていた。春樹はまだプロデビュールしていない。つまりまだ無名のアマチュアバンドのギタリストだ。だから、プロの業界人を紹介してもらえろという話は予想外だった。しかも、そんな話題がゆいからの唇から洩れるなんて。それは驚きを超えていた。

2人は新宿駅から一緒の電車に乗り、ゆいからは渋谷駅で降りた。春樹は電車のドアにもたれながら、山手線の窓の外に流れる夜の都会のネオンサインを見つめていた。何て明るい夜なんだろう。TOKYOの夜って、これほどまでに光り輝いていたのか。春樹には目の前を流れていく冬の夜のTOKYOの光景がまばゆかった。けれどもその光はいつもどこか偉そうに胡散臭い。結局のところ、今夜ゆいかはプロデューサーの男性を紹介するために自分を食事に誘ったのか？ いや、それならわざわざ2人で食事をしなくても、ライブハウスの帰りにでも言ってくれば済む話だ。それともオレに何かしらの恋愛感情があるのか？ オレは何を信じればいい？ それとも何も信じない方がいい？ そうだろう。その方が楽だ。信じるには負担が伴う。さまざまな不安や不信や希望や高揚感が、春樹の胸を通り過ぎた。いずれにせよ自分がゆいかに片想いをして、他の男達のようにエキセントリックな状況になることだけは避けたかった。それだけは何としても避けなければ。しばらくして品川駅のホー

ムに降りた春樹の顔に、冬の夜風が吹き付けた。目を覚ますには、ちょうどいい風だった。